

第4章
非日常におけるヴァラナシの社会構造

第4章 非日常におけるヴァラナシの社会構造

4-1 緒言

前章ではヴァラナシにおける河川 = ガンジス川、河岸空間 = ガート、コミュニティ = モハッラの関係性について日常の社会構造という視点から考察を行った。

本章では祭 = 日常性によってより明確に現れる河川、河岸空間、コミュニティの関係性を祭の構造、祭開催時における社会構造という視点から明らかにし考察を行う。また前章で明らかにした日常の社会構造に対し与える影響についても考察を加えることを目的とする。対象とする祭は約 6.4km ある 84 のガートをオイルランプによって飾り付ける Dev Diwali 祭とした。

4-2 Dev Diwali 祭

4-2-1 Dev Diwali 祭の背景

表 4-1 ヒンドゥー暦と太陽暦の対応表

	月の名前	太陽暦との対応
1	CAITRA	3月-4月
2	VAISAKHA	4月-5月
3	JYESTHA	5月-6月
4	ASADHA	6月-7月
5	SRAVANA	7月-8月
6	BHADRAPADA	8月-9月
7	ASVINA	9月-10月
8	KARTTIKA	10月-11月
9	MARGASIRSA	11月-12月
10	PAUSA	12月-1月
11	MAGHA	1月-2月
12	PHALGUNA	2月-3月

日本の暦に旧暦や節句などが存在するように、インドにおいても数種類存在する。日本などで一般的に使われている季節、週などはもちろんのこと、十四夜¹⁾(15日周期)というものがある。十四夜には14夜目に新月を迎える Krsnapaksa と、14夜目に満月を迎える Suklapaksa があり、この二つが一对で一月となり表1に示したヒンドゥー暦は構成される。

Dev Diwali 祭はこのヒンドゥー陰暦のカルティカ月の最終日 (Suklapaksa の15日目) に行われる。本来の名前をカルティカ・プルニマ KARTTIKA PURNIMA (カルティカの満月の

意。) と呼ばれるのはそのことに由来している²⁾。



図 4-1 2001 年のカルティカ・プルニマ

表 4-1 の 2 : VAISAKHA、8 : KARTTIKA、11 : MAGHA は伝統的にヒンドゥー陰暦上、ガンジス川など河川において沐浴をすると高い徳が得られると伝えられる³⁾。その中でも特にカルティカはヒンディー陰暦上の新年の始まりに当たる Diwali 祭があるなど、非常に神聖な月とされている。Diwali 祭がヴァラナシのある北インドでは長く鬱陶しい四ヶ月にも及

ぶ”Chaturmasa”と呼ばれる雨季の終了する時期にあたり、気候的にも新年の節目となる月であることが分かる⁴⁾。「神聖」「気候的節目」「新年」という性格を併せ持ったカルティカは、一年 = 十二ヶ月という尺で考えた場合、最も「非日常的な一ヶ月」と言うことができる。



図 4 - 2 パンチャガンガ ガートの飾り付け用石製の台
(左、右上：点火の様子、右下：日中の様子)

元来、カルティカ プルニマの祭はプルニマ ガートにオイルランプで飾り付けることによって行われるものであった。その理由はプルニマの持つ特質性と「カルティカはビシュヌ神 Vishnu⁵⁾の月であり、カルティカはプルニマの月である」という民間伝承の話からも考えられる。また 1868 年発行の Sherring の著書に「The Kartik Purnima Mela, held at the Panch Ganga Ghat, on the last day of Kartik. -中略- On the last day multitudes bathe here; and in the evening, the ghat is illuminated. Formerly pugilistic combats used to take place; but they have

now ceased.」⁶⁾と言う記述を見ることができる。当ても飾り付けに使っていた石製の柱が現在も残っており(図 4-2) Dev Diwali 祭で現在も使用されている。とはいえ 84 あるガート群の中で、パンチャガンガーガートだけでの小規模な祭であったということは、Sherring の記述からも容易に推測できるであろう。

4-2-2 Dev Diwali 祭の現状

プルニマで昔から行われてきたオイルランプによるパンチャガンガーガート周辺の飾り付けが、14、5 年前から周辺のガートでも行われるようになった。それはプルニマ周辺からダサシュワメダなどのメインガートと呼ばれる地域に広がり、10 年程前からはほぼ全ガートが参加して飾り付けを行うヴァラナシを代表する祭になり、現在では毎年、試行錯誤を重ねた結果、¹ヴァラナシの住民はもとより、インド内外からの多くの観光客を魅了する祭となっている。Dev Diwali 祭の開催日はカルティカの満月の日だが、その日を含め 5 日前から行われている U.P.州政府観光局 (Department of Tourism, Govt. of Uttar Pradesh) 主催の「Ganga Mahotsav⁷⁾」というイベントの最終日⁸⁾に開催されている。

この「祭」の最大の魅力とはガートに隣接するモハッラの住民の手で日常使用している各ガートを何千、何万というオイルランプで飾り付けられることによって、浮かび上がる幻想的な光のページェントである。

しかし、この祭りは近年、NPO や市民によって、本来の伝統的な祭の意味に、「ガンジス川をきれいに」というメッセージが付け加えられ、環境保全のきっかけにしようという動きがあり意味付けの拡張が見られるという特長を持つ、ヴァラナシの祭の中ではとても歴史の浅い祭である。

4-2-3 「伝統的仕掛け」と「現代的仕掛け」

4-1 で、本来は Dev Diwali 祭に含まれていなかった意味付けの拡張が見られると述べた。次節では Dev Diwali 祭がヴァラナシの日常の社会構造に対し与えている影響を明らかにするため、本来 Dev Diwali 祭にあった部分を「伝統的な仕掛け」、拡張された部分を「現代的な仕掛け」とする。

手順としては、「伝統的な仕掛け」を文献と現地フィールドワークから明らかにする。そして「現代的な仕掛け」を現地フィールドワークによるヒアリング調査から明らかにする。

4-3 祭の構造からの考察 伝統的仕掛け

祭と宗教を一つの手がかりとして、現代社会へのアプローチを試みている芦田は祭を「同一の社会集団のメンバーがある限定された(つまり『非日常』的な)時間と場所で一堂に会し、『身内』または『仲間』としてのお互いの『同一化』をとおして、『共同性』を(再)確認するための社会的・文化的な仕掛けの一つとあってよい」⁹⁾と定義している。そして神を人のそばに引き寄せ、神と人が一緒になって楽しみ、メンバーの一体感を高め

る「祝祭性」、神と人のある一線によって、神すなわち社会集団そのものへの畏敬の念を表現する「儀礼性」という二つの表裏一体の性質が祭にはあるとしている。

また、本項では芦田の定義を元に、Dev Diwali 祭の伝統的仕掛けを明らかにする。

4-3-1 オイルランプの意味（イメージ）

Dev Diwali 祭が現在の形になり、多くの観光客、地元住民を集め魅了する最大の要因は、何千、何万とガート上に並べられるオイルランプの美しさが考えられる。しかし、それは単純な美しさではなく、ヴァラナシの持つ聖地性・宗教性に起因するコスモロジーの表象であるためではないだろうか。また「祝祭性」がオイルランプ=火に備わっているためではないか。

そこで、オイルランプの意味というものを先ず考え、伝統的仕掛けを明らかにする過程の、第一段階と位置付ける。



図4-3 火の神「アグニ」

(1) 神話観にみられる、インドでの火のイメージ（オイルランプの持つイメージの原型）

インド最古の経典ヴェーダには「アグニ(Agni)」という火神が登場する¹⁰⁾。アグニという名は火を意味し火の機能を生物的に表象したものとされている(図4-3¹¹⁾)。ヴェーダとウパニシャッドについてまとめた辻の著書には¹²⁾「このアグニの最大の役割は祭場における聖火たる点にある。中略-彼は自己の中に投入される供物を天の神々に運ぶと同時に、神々を祭場へ運ぶ。この意味で彼は、神・人の間の仲介者とされ、使者と呼ばれる。」

この記述から、インド人が古代から祭祀¹³⁾における火に対して人々の持っていた<神・人間>を

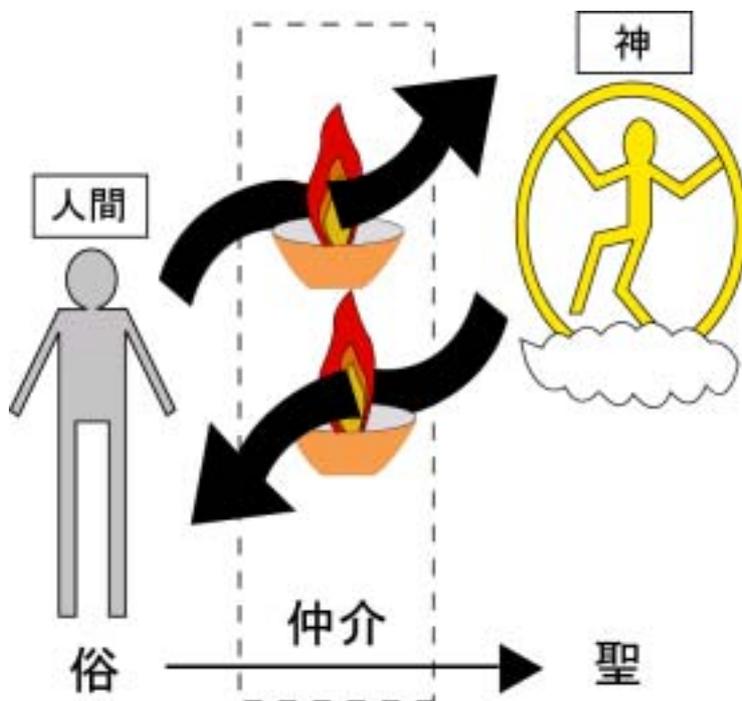


図4-4 人間と神の仲介役としての火

媒介する、もう少し言えば<神の世界 - 人間界>を繋ぐというイメージを見て取ることで
きる(図4-4)。この火に対するイメージは、オイルランプに対して人々が抱くイメージ
の原型になっているということができるだろう。

(2) 非日常 = 祭にみるオイルランプのイメージ

次に現在における非日常に見受けられるオイルランプのイメージへと目を移してみる。

ヒンドゥー陰暦上の新年にあたる Diwali 祭では、オイルランプが街路、家の周囲に飾ら
れる。Diwali 祭は悪(闇)に対する善(光)の勝利を祝う祭であり、「光の祭り」とも言わ
れる。オイルランプを飾り付けることは「富と健康がやってくる」という民間伝承に由来
している。その他にもオイルランプによって神への畏怖と共に神に対し富や健康を願う、
導き入れる祭が多数ある¹⁴⁾。現在では日常にある<神 人間>という絶対的なヒエラルキ
ーの中で、神と近づくために用いる装置であることがわかる。

(3) カルティカ(非日常な月)の毎日(日常)にみるオイルランプのイメージ



図4-5 アカシュディーパ(左:ガートに設置された様子、右:拡大図)

非日常にある日常にもオイルランプのイメージへと目を移してみる。

ヒンドゥー陰暦のカルティカが一年の中で最も神聖な期間であることは既に述べた通
りである。この最も神との繋がりが濃厚なヶ月間(=非日常な月)にのみ、毎日(=日
常)ガートに設置される<空のランプ>という意味を持つ「アカシュディーパ(Akashdipa)」
がある。20mほどの竹の先端近くに細い枝で編まれたカゴが付いた形状をしている(図4
-5)。夕方になると付近の住人によって、文句を唱えながらその籠の中にオイルランプが
入れられる。このアカシュディーパの意味とは死者が先祖の所に行く道を照らすため¹⁵⁾
と民間伝承ではされている。しかし、実際にヴァラナシの住民に聞いた話によると、それ

ほどまでの厳密な意識ではなく、神に対してランプを見せる、掲げるという感覚に近いようである。いずれにせよ、オイルランプは<神 - 人間>を結びつけるというイメージであり、神聖な月にのみ許される神との結びつきの日々（一ヶ月間）を確認するための装置であることが分かる。

(4) 日常にみるオイルランプのイメージ

ヴァラナシの街のそこら彼処に見受けられる「祠」や「寺院」、「聖樹¹⁶⁾」では、近所の人々によって、献花と共にオイルランプがおかれている。日常の生活の中でも神と接する時にはオイルランプが言わば、俗から聖へのスイッチの役割を果たしているのである。

(5) オイルランプの意味とは

オイルランプの持つ意味は総じて以下のようにまとめることができる。

オイルランプの原型というべき火は常に神 人間の間領域を支配するものであり、神と人間の仲介者である。そしてその火は、現在、オイルランプという形で神という聖の象徴と人間という俗世界のものと繋がるための装置となっている。また、芦田の言う「神を人のそばに引き寄せ」¹⁷⁾するための装置であり、すなわちデュルクムの言う聖俗循環（分類モデル）の聖なる時と俗なる時の規則的な交代¹⁸⁾のポイントということができる。

つまり、住民にとってオイルランプを飾り付けて点火することで、Dev Diwali 祭に参加するということが、<神の存在を意識する>というを意味しており、すなわち、デュルクムの言う「聖 俗循環論」で説明がつく。人々はオイルランプ = 祝祭性という装置によってヴァラナシのコスモロジーという共有イメージを持つこととなり（呼び覚まされる）、非日常 = Dev Diwali 祭に大勢の人々が集う要因となっているのである。

4-3-2 伝統的仕掛け

次は 2000 年、2001 年度の調査を基にオイルランプという装置による飾り付けという現象について、詳細に記録し、観察することから「伝統仕掛け」を明らかにする。

【調査概要】

ここでは飾り付けの調査概要を述べる。

2000 年 11 月 11 日、及び 2001 年 11 月 30 日において実施した。調査内容については以下の通りである

- ・ 地図への各ガートの飾り付けエリアのプロット
- ・ 飾り付けの様子を映像により記録
- ・ 飾り付けのリーダーに対するヒアリング

【調査地区】(図 4-6)

南は「ダサシュワメダガート」から連続するガートを北に向かって「パンチャガンガーガート」まで行った。

【選定理由】

選定理由は以下の通りである。

第2章で取り上げたダルマクープ地区でのヒアリング調査で住民から挙げられたガートを全て含んでいる。

ダサシュワメダガートはメインガートと呼ばれ、パンチティールタの一つであり最も神聖で最もポピュラーなガートである。パンチャガンガーガートもパンチティールタの一つである。そしてちょうど中間点付近にも、パンチティールタの一つマニカルニカガートを含んでおり、ダサシュワメダガートと並ぶ神聖でポピュラーなガートであり、5大ガートを3箇所含んでいる。そしてそれらガートの間には、前章で述べた、「ローカルガート」と呼べるものが14箇所含まれていることから、多種多様なデータ収集が可能である。

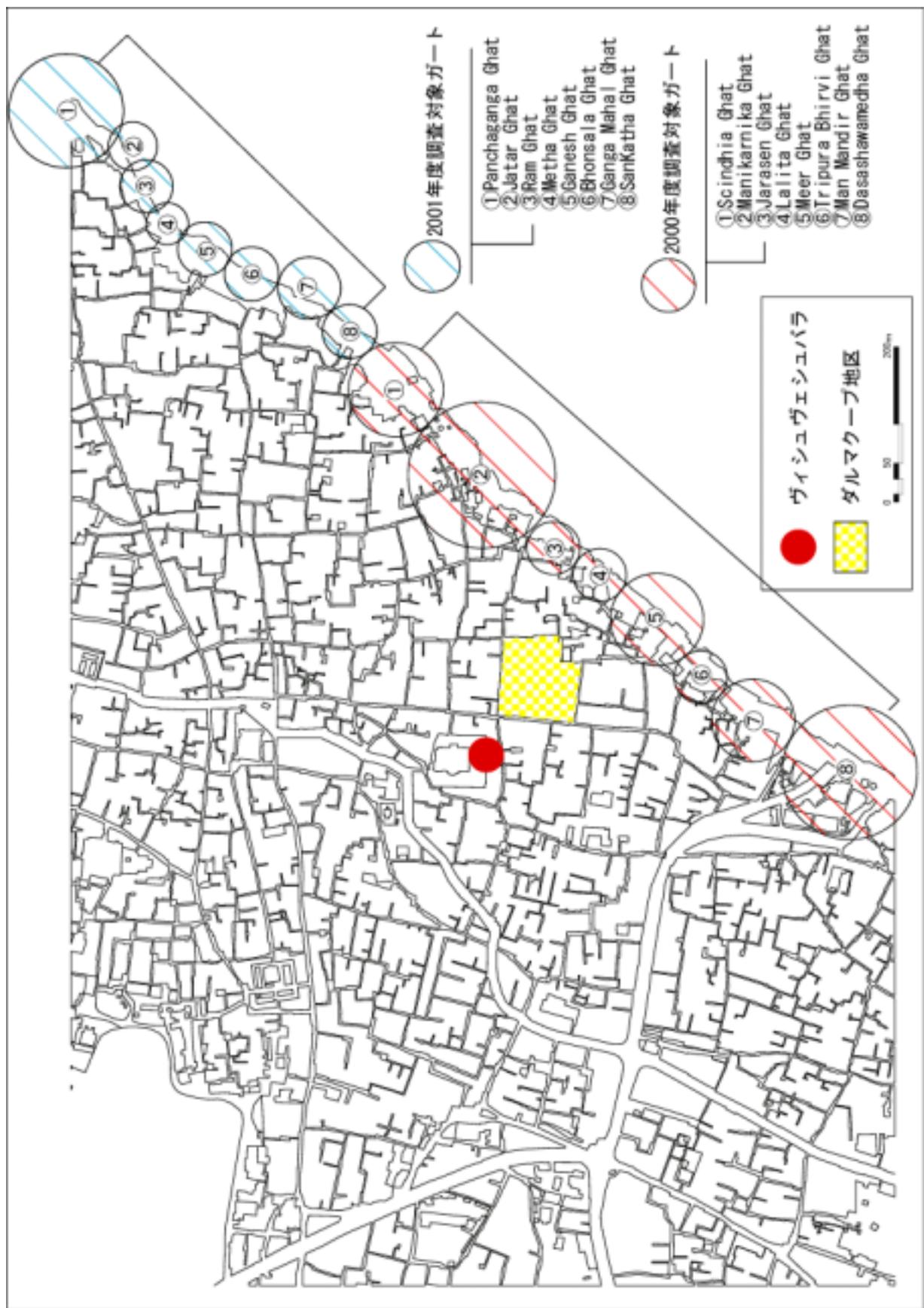


図4-6 飾り付けに関する調査を行ったガート

(1) 自己 - 他者認識による中間集団アイデンティティの確認



図 4 - 7 飾り付けの様子（左：マンマンディールガート、右：シンディアガート）

Dev Diwali 祭でのガートがオイルランプを飾り付けるという行為は非常に特徴的である。84 あるとされるガートの飾り付けは、84 のガートがカルティカ・プルニマの日に一斉に行われるものの、基本的にはガート単位¹⁹⁾で行われており、各ガートによって形態や方法がそれぞれ異なっている。飾り付けを行うのは、周辺モハッラを元にして結成される祭り用のサミティ Samiti やクラブ Club という組織が行っていることが分かった。サミティとは英語の committee に相当し委員会や自治会という意味として用いられている。具体的なサミティに関する考察は「4 - 4 現代的仕掛け」で、より詳しく行うのでここでは、「Dev Diwali 祭の際にガート毎に結成される祭組織」という程度でとどめておく。



図 4 - 8 「競い」の意識例（上下共：マニカルニカガートとシンディアガートの境）

4 - 2 - 1 では Dev Diwali 祭ではオイルランプという装置によって抱く共有イメージによって多くの人が集ってくるとした。つまり共有イメージにより人々の一体化が進み、大勢の人を集め、結束を高める効果があるというわけである。しかし、実際の飾り付けという現象をそれによって全てが完全に平等化され、一体化するわけではないのである。

既に述べた通り 84 ガートはそれぞれ飾り付けられるため、一見すると平等化され一体化しているとは言いがたい。むしろ、他のガートといかに違う飾り付けができるかという点に重点が置かれている様子すら伺える。それぞれのガートで、前年とは違った色を使い、思い思いの絵を描いてオイ

ランプに点火するための準備を行うのである。



図 4 - 9 各ガートの飾り付けの範囲

図4-9はガート毎の飾り付けの範囲を地図中に示したものである。他のガートとの「競い」意識の飾り付けの顕著な例としてシンディアガートを挟むマニカルニカガートとサンカタガートの間には図4-8のような竹の柵によって歴然とした境界線が築かれていることが分かる。数年前には各ガートの飾り付けの美しさを競うコンペ形式の年もあった。

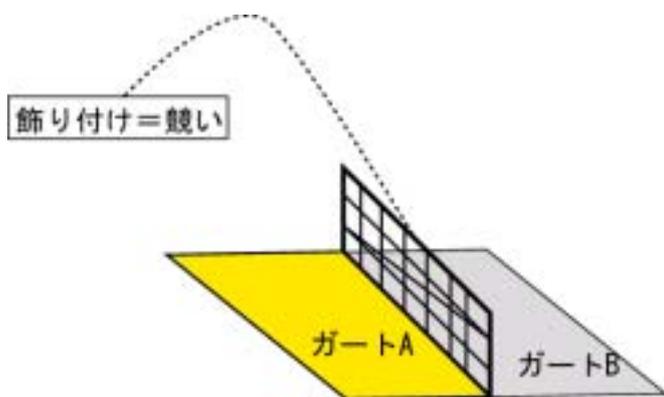


図4-10 自他を区別する構造

これは伝統的仕掛けとして Dev Diwali 祭には芦田の言う「自他を区別する側面」²⁰⁾という伝統的な祭においてみられる構造が「飾り付け」という現象として現れていると考えられる(図4-10)。

この現象はオイルランプによって示されるイメージとは一見相反するようであるが、「お互いに張り合う祭り行事(筆者註:例えば、踊りや演奏の競い合い。自他の区別すること

を指している。)は、一見したところ、人々の一体化をかえって阻害するように思えるかもしれない。しかし実はこのことは、一つの全体的な集団の中のさらにより小さな、しかしより身近な集団を確認するために、祭りの中の制度化された対立であり争い」の²¹⁾構造をもっているとの見方ができる。ここで言う、「自他を区別する」ことが「自分達が使用しているガートを飾り付けることによって、その他のガートと差異をつけることで発生する『競い』の意識」のことであり、「より身近な集団」とは「ガートを飾り付ける集団」

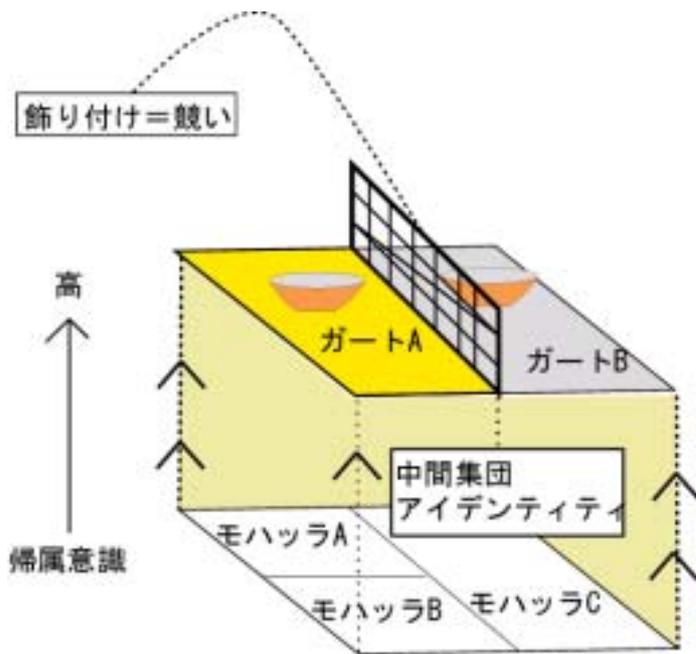


図4-11 自己-他者認識の構図

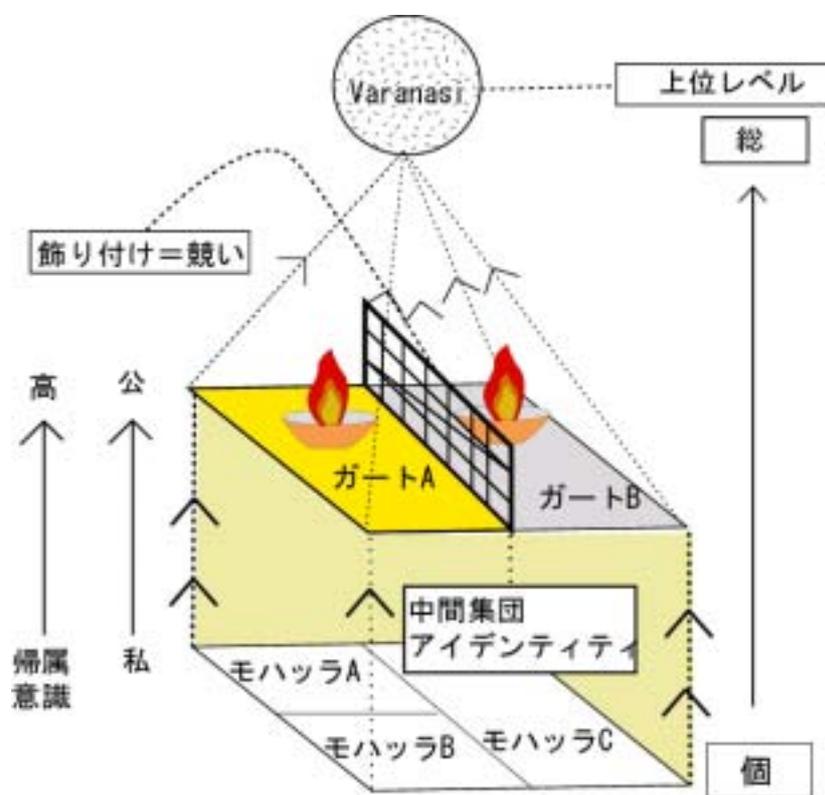
＝「モハツラ」＝「サミティ」ということになる。そしてそれを「確認」することが自らの「帰属意識」を高める＝アイデンティティの確認ということに他ならない。祭りの中で制度化された対立、争いの中で他集団を認識していることが、自集団の認識を強化するという自己-他者認識の構図が Dev Diwali 祭には現れている(図4-11)。つまり祭内でガート同士の「競い」の意識が、自己の所属の確認を促がし、自分達が他の何者でもないという中間集団(モハツラ)とし

て先ずアイデンティティの確認があり、ヴァラナシの住民としてのアイデンティティを確認するための過程だと位置付けることができるだろう。

Dev Diwali 祭では日常の「ガート」と「モハッラ」の関係性が、非日常に起こる変化によって中間集団のアイデンティティの確認 = 帰属意識の高まりという構図を創りだしていると推測することができる。日常生活において、周辺モハッラの住民にとってのガートとは生活の場であった(第3章参照)。特に「タイト」で「ローカル」なガートを使用するモハッラの住民にとって、日常行為の場という性格がガートには強く、ガートの持つ地域性による影響が大きかった。

しかし、ガートと周辺モハッラの境界に設置される門から、モハッラの住民は内と外を意識することで、モハッラ = 私空間、ガート = 共空間、ガンジス川 = 公空間という構造が出来上がっている。この構造が Dev Diwali 祭によって、この公共私概念は劇的な変化を見せる。飾り付けを行う周辺コミュニティにとっては、ガートはモハッラの延長となり、自分達の空間として「私」空間へとガートを取り込んでしまう。つまりガートとの間の空間認識としての境界は取り払われてしまうのである。そして祭時の飾り付けによってモハッラ = ガートという関係が浮かび上がり、自己の帰属を再確認することになるのである。

(2) 「個」から「総」への統合によるアイデンティティの確認



自己 他者認識によって、中間集団におけるアイデンティティ確認されると、より上位レベルで「競い」の意識は解消される。芦田の言う「競争や対立はより上位レベルで解消され、『われわれ』という『身内/仲間』意識の中で統合」²²⁾が起こるわけである。その瞬間²³⁾は夜ではないだろうか。理由としては二つ考えられる。

オイルランプが点される瞬間。

つまりより上位レベルでの統合とは、最初に述

図4-12 「個」から「総」への構造

べたオイルランプによってもたらされる、ヴァラナシのコスモロジーという共有イメージによって「個」から「総『ヴァラナシ』」という意識の統合を表している。

数年前に一度だけ、コンペ形式でによる Dev Diwali 祭が行われたとことについては既述したとおりであるが、このコンペ形式は、一度行われたきりで、その後行われることがなかった。その理由は、人々が神様に対する祭の中で、コンペティションすることに抵抗したという話だった。これも最終的な「総」という形を破壊してしまうものだと考えたためではないだろうか。

また、飾り付けのリーダーへの質問として、〈Q.他のガートよりも美しく飾りたいか〉という質問に対し、回答の得られた 11 のサミティにおいて、7 つのサミティが「NO」という回答で、他のガートを賞賛するところさえあった。これも同じ理由の現れだと考えられなくはない。

観光客の影響

Dev Diwali 祭を目当てにやってくるインド国内外からの観光客たちは軒並み、オイルランプに火が点されて、幻想的なガートとガンジス川の姿が浮かび上がる夕方にやってくる。飾り付けが終わり、火が点される時点で、「競う」という意識が、「観光客」から見られているという意識に変化する瞬間に、ヴァラナシに「やってきた観光客」とヴァラナシの「地元の住民」という明確な二項対立概念が出来上がり、飾り付けをしていた各住民はガートを飾り付けていた「中間集団」からヴァラナシという「総」へと統合される。

(3) 伝統的仕掛けのまとめ

伝統的仕掛けとは以下のようにまとめられる。

自己 他者認識

それぞれのガートでの飾り付け差異は、伝統的仕掛けとしての「競い/争い/競争/対抗」という意識の現れであった。しかし、そのことが自己 他者という関係性を認識させ、より身近な集団 = 「ガートを飾り付ける集団」 = 「モハツラ」 = 「サミティ」というより身近な集団を再確認する仕掛けであった。これを中間集団（コミュニティレベル）におけるアイデンティティの再生過程と呼ぶことができる。

「個」から「総」

自己 他者認識によってもたらせている「競い」などの意識は、ヴァラナシの上位レベルで統合される。その理由として考えられるのは二つあり、一つ目はオイルランプの点火にもたらされるヴァラナシにおけるコスモロジーの共有イメージのため。二つ目は観光客の影響で「観光客」「地元民」という二項対立概念の明確化による、意識の上位化である。

アイデンティティの重層的構造

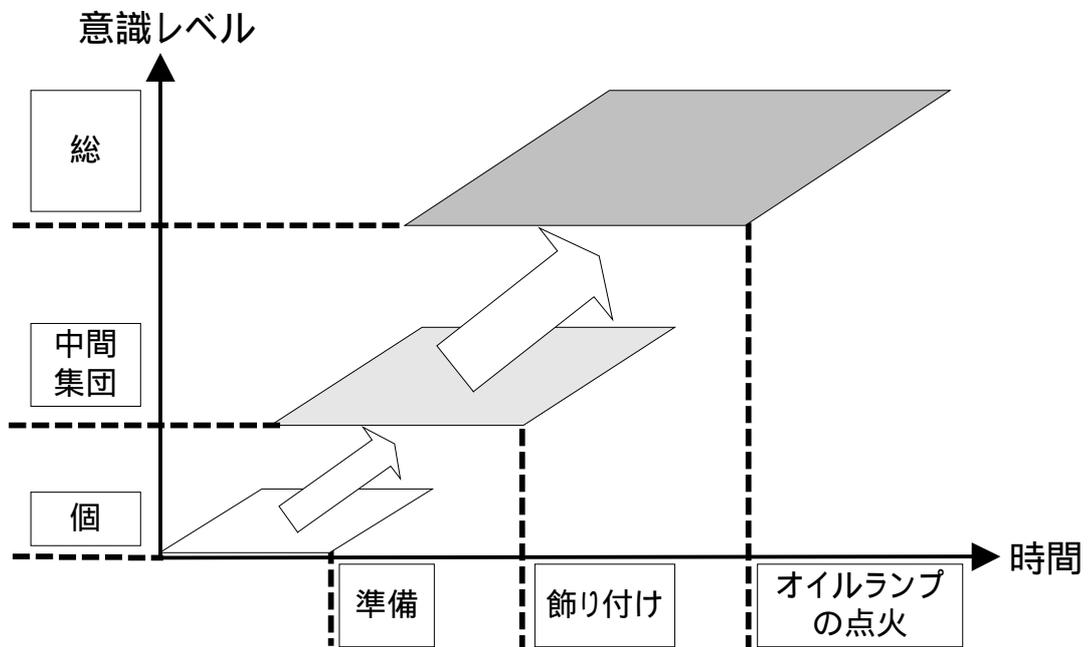


図 4 - 13 重層化された各レベル

Dev Diwali 祭の「伝統的仕掛け」に見られる「自己 他者認識」、そして「『個』から『総』」への住民のアイデンティティの変化は、個人より始まった祭への参加が、中間集団 = モハッラとしてアイデンティティを確認するという過程を得て、「総体」= ヴァラナシの住民としてのアイデンティティを形成しているといえるだろう。また、「個 - 中間 - 総」という、時間の経過に伴った、ガートの飾り付けが行われ、オイルランプに火が点されるという、イベントの進行と共に、意識レベルの上昇があり、そこには各意識レベルが重層化されている構造があるといえる（図 4 - 13）。

4 - 4 現代的仕掛け

4 - 4 - 1 現代的仕掛けとは

4 - 3 によって、Dev Diwali 祭が持つ祭の伝統的仕掛けのもたらす効果についてまとめた。伝統的仕掛けとは、文化・伝統によって受け継がれてきたものを元にしたものであり、それを取り入れることで、Dev Diwali 祭によって住民がヴァラナシの住民であるということを確認するという構造を作り上げている事がわかった。Dev Diwali 祭は本来、パンチャガンガ ガートで行われていた小さな祭であり、それが現状で述べたような大きな祭になったことは、この「伝統的仕掛け」が仕掛けられた効果だといえる。しかし、14、5 年前に始まり、現在の体裁を取るようになってからは 10 年程度しか経過していない。また、近年、祭の概要で既述した通り、この祭には「ガンジス川をきれいにしよう」というメッセージが込められるようになり、祭りの意味付けを拡張している。この現代的な問題意識は、伝統的に続けられてきた祭には決して見ることのないものである。つまり、ヴァラナシの住民に「聖川ガンジス」との宗教的な関係性に付け加え、「水環境としてのガンジス」との関係性をこの祭では求めているのである。これを本研究では意味の拡張と位置付け、「現代的な仕掛け」と呼ぶこととする。

4 - 5 - 2 仕掛ける主体について

現代的仕掛けとはそれまであった、「伝統的な関係性に新たな関係性を与えるためのもの」と本研究では定義した。Dev Diwali 祭で、伝統的仕掛けとして周辺コミュニティがガートを飾り付けるにあたり、その仕掛けをオーガナイズする組織として、周辺モハッラによって結成された「サミティ (samiti)」や「クラブ (club)」という自治 (会) 組織があることに触れた。そして主体として「仕掛ける」側と、客体として「仕掛けられる」側という関係性で見た場合、「飾り付け」の行為を仕掛ける主体は、サミティやクラブであり、当然、仕掛けられる客体が「ヴァラナシの住民」ということになる。また、このサミティやクラブといった自治 (会) 組織は「現代的仕掛け」においても、これをオーガナイズしている。

ここでは、まず「仕掛け」を仕掛ける主体である、サミティやクラブについてヒアリング調査を基に実状を明らかにする。なお、ヒアリング調査行った対象については 4 - 4 と同じであり、ヒアリング項目は以下の通りである。

【ヒアリング項目】

1. サミティ、もしくはクラブ名前
2. 飾り付けの対象とするガート
3. 構成

4. 参加しているモハッラの名前
5. 構成の人数
6. 祭参加者の数
7. 資金の収集方法
8. 他に対する対抗意識の有無
9. 部外者の参加の有無
10. その他

以上の項目において、1.サミティ名、もしくはクラブ名、4.モハッラ名については表4-2(番号は図4-9に対応)にまとめた通りである。

表4-2 2000年度、2001年度 Dev Diwali 祭で各ガートをオーガナイズしていた「サミティ名、もしくはクラブ名」と、その対象となる「ガート」一覧

	対象ガート名	サミティ名、もしくは クラブ名、他	モハッラ
1	Dashashwamedh-1	Gangotri sewa samiti	Dashashwamedh
2	Dashashwamedh-2	Ganga sewa nidhi samiti	Dashashwamedh
3	Rajendra Prasada	不明。政府観光局か？	不明
4	Manmandir	Manmandir Vikas Samiti	Manmandir
5	Tripura Bhairvi	Tripura Bhairvi Dev Diwali Samiti	Tripura Bhairvi
6	Meer	Mun Ganga Sporting club	Meer
7	Lalita	Kashi Vishwanath Mandir Trust (reg)	Vishwanath
8	Jarasen	Nav Yuvak Kalyan Samiti	不明
9	Manikarnika-1	Man Ganga Nav Yuwak samiti	Manikarnika
10	Manikarnika-2	Satyam Prachar Mandal	Manikarnika
11	Scindhia	Shri Sidhn Hunuman Nav Yuwak Samiti	Scindhia, Gola Gali
12	Sankatha Ganga Mahal	Man Ganga Arti Dev Diwali Samiti	Ganga Mahal
13	Bhonsala Ganesh Metha	Metha Sporting club	周辺
14	Ram	Sargenick Club, Ram Ghat, Varanasi	Ram Ghat
15	Jatar	Kendriya Dev Diwali Samiti Gomersers	Jatar
16	Panchaganga - 1	Panchi Ganga Sporting Club	周辺
16	Panchaganga - 2	Vindu Madav Sewa Sewa Samiti	Panchiganga

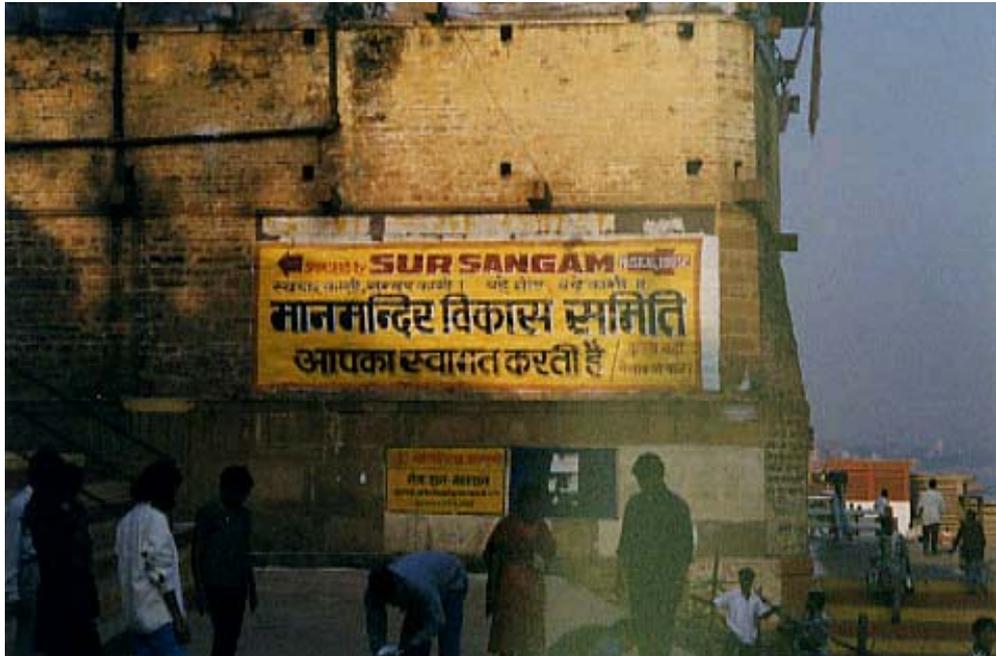


図 4 - 14 マンマンディールガートの壁に描かれたサミティの名前
「Manmandir Vikas Samiti」の文字（ヒンディー語の部分）

(1) サミティ、クラブ概要

サミティ samiti とは英語の committee に該当する言葉である。committee とは「委員会；集合的には委員。委任された人々という意味」である。ヒアリングの結果では、一つのモハッラに一つのサミティ（モハッラの規模や地理的条件によっていくつかのモハッラが合同になったり、分離したりする場合もある）が結成されていた。ヴァラナシでのサミティとは、モハッラ内や街で祭や集会のようなイベント事が行われる時に機能するものである。サミティの影響力は強く、モハッラとしての結束を象徴するものである（図 4 - 14）。祭などの場合には、サミティの青年会として参加しているケースも多々あるようで、そのような場合はサミティの名前には「若い」を意味する「yuwak」という言葉が用いられていることが多く、祭の名前が入る（表 4 - 2）。

クラブは、主にいくつかのガートの住民が参加しているクリケットチームである。サミティ程の強い拘束力はない。サミティがさほど機能していない、もしくはクラブがサミティ同様の機能を果たす場合には、祭の飾り付けなどを行うことがあるようだ。

(2) Dev Diwali 祭でのサミティとクラブ

次は具体的に Dev Diwali 祭でのサミティ、及びクラブの役割について分析と考察を行う。

サミティ、及びクラブの構成

サミティ及び、クラブのメンバーがどのような人々によって構成されているのかということについて、ヒアリング結果から分析を行う。

表 4 - 3 サミティ、もしくはクラブのメンバー構成一覧

	対象ガート名	サミティ名、もしくは クラブ名、他	モハッラ	メンバー構成
1	Dashashwamedh-1	Gangotri sewa samiti	Dashashwamedh	モハッラ+ボランティア
2	Dashashwamedh-2	Ganga sewa nidhi samiti	Dashashwamedh	モハッラ+ボランティア
3	Rajendra Prasada	不明、政府観光局か？	不明	不明
4	Manmandir	Manmandir Vikas Samiti	Manmandir	モハッラ全員
5	Tripura Bhairvi	Tripura Bhairvi Dev Diwali Samiti	Tripura Bhairvi	モハッラ全員
6	Meer	Mun Ganga Sporting club	Meer	モハッラ全員
7	Lalita	Kashi Vishwanath Mandir Trust (reg)	Vishwanath	Varanasiの住民
8	Jarasen	Nav Yuvak Kalyan Samiti	不明	不明
9	Manikarnika-1	Man Ganga Nav Yuwak samiti	Manikarnika	一家族
10	Manikarnika-2	Satyam Prachar Mandal	Manikarnika	モハッラ全員
11	Scindhia	Shri Sidhn Hunuman Nav Yuwak Samiti	Scindhia, Gola Gali	モハッラ全員
12	Sankatha Ganga Mahal	Man Ganga Arti Dev Diwali Samiti	Ganga Mahal	モハッラ全員
13	Bhonsala Ganesh Metha	Metha Sporting club	周辺	クリケットチーム
14	Ram	Sargenick Club, Ram Ghat, Varanasi	Ram Ghat	モハッラ全員
15	Jatar	Kendriya Dev Diwali Samiti Gomersers	Jatar	モハッラ全員
16	Panchaganga - 1	Panchi Ganga Sporting Club	周辺	クリケットチーム
16	Panchaganga - 2	Vindu Madav Sewa Sewa Samiti	Panchiganga	モハッラ全員

サミティ、及びクラブの構成は、表 4 - 3 より以下の、5 タイプに集約することができた。

- a) 「モハッラ」+「ボランティア」型
- b) 「政府」型
- c) 「家族」型
- d) 「モハッラ」型
- e) 「スポーツクラブ型」

では、この5つのタイプについて、それぞれがそのような構成になった要因について、資金の集め方と絡めながら詳細にみてゆく。

- a) 「モハッラ」+「ボランティア」型

表 4 - 4 調査地区における「モハッラ」+「ボランティア」型のサミティ一覧

	対象ガート名	サミティ名、もしくは クラブ名、他	メンバーの構成	モハッラ名
1	Dashashwamedh-1	gangotri sewa samiti	モハッラ+ボランティア	Dashashwamedh
2	Dashashwamedh-2	Ganga sewa samiti	モハッラ+ボランティア	Dashashwamedh

このタイプで構成されているサミティは上の表 4 - 4 にあげる 2 つである。

まず、特徴として挙げられるのは、この 2 つのサミティがどちらもダサシュワメダガートで見られたタイプであることである。別名を「メインガート (main ghat)」と人々から呼ばれ、ヴァラナシの象徴、及びティールタとしてヴァラナシの住民にとってはもちろんのこと、この街を訪れる観光客、巡礼者にとってハイライトであり、最も重要な位置付けをされている場所である。第 2 章の中で述べた概念によって鑑みると、“「ルーズ」で「アンローカル」なガート” だということができる。そのため多くの巡礼者、観光客を集め、ダサシュワメダガートからゴドウリア交差点へ伸びる街路一体は、衣食に関する多くの商店、マーケットが密集しており、街の中心街を形成している (図 4 - 15)。大勢の人々が押し寄せる Dev Diwali 祭時にはダサシュワメダガートが最も人が集まる場所となる (図 4 - 16)。また、当日は毎日行われているアールティという儀式が、いつも以上に盛大に行われる、飾り付けに関しても“「タイト」で「ローカル」なガート”とはまったく違った状況になる。

サミティの構成は地域有力者がリーダーとなり、モハッタ住民とボランティアによって構成されている。また、Dev Diwali 祭のために結成されているモノではなく、上述の通りヴァラナシの顔としてのダサシュワメダガート周辺の日常的な美化活動を目的に結成されているサミティという名の地域に根付いた活動をする「NPO」といった面が強い。



図 4 - 15 ダサシュワメダガートから
ゴドウリア交差点の風景



図 4 - 16 Dev Diwali 祭にダサシュワメ
ダガートに集まる人々(上下共)



図 4 - 17 サミティのロゴとスポンサーのロゴが印刷されている Ganga Sewa Nidhi Samiti
で配られていた 2001 年 Dev Diwali 祭のパムフレット

また、サミティ運営費は住民からの寄付はもとよりスポンサー企業（TAJ HOTEL 等々）からも得ているため、Dev Diwali 祭での活動のみならず、「ローカル」「タイト」なガートとは明らかに違う活動が可能となっている（図4-17）。そういった点を考慮すると、やはりダサシュワメダガートの持つ場所性が、そういった運営を可能にしていると考えられる。また、スポンサーから得られる資金を背景に、日常の清掃活動などでは作業員の雇用も行っている。

飾り付けに関しては特別に観覧席のようなものをガート内に設けたりもしている。飾り付けの方法に関しても、オイルランプの設置に力を入れるというよりは、むしろそういった観覧席やアールティのための舞台作りなどに力が入れているため、業者に依頼するなどの方法をとる。

b) 「政府」型²⁴⁾

このタイプは唯一ラリタガートで見受けたタイプである。

ラリタガートには背後に同名のモハッラがあるのだが、2001年度に飾り付けを行っていたのは「Kashi Vishuwanath Mandir Trust²⁵⁾」が行っていた。その名前からは供託という組織のようである。飾り付けなどは彼らが中心となって、ラリタガート（モハッラ）の住民と一緒に飾り付けを行っていた。メンバーの構成は、建前上ヴァラナシの住民ということになっていたが、実際よく聞いてみると、ヴィシュベシュヴァラ寺院参道のモハッラである「Vishuwanath Gali」というモハッラが中心のようである。



図4-18 ゴールデンテンブル

ヴィシュベシュヴァラ寺院敷地内にあるゴールデンテンブル（図4-16）はヒンドゥー教徒以外が入ることはできない特殊な場所である。アンタルグリハ巡礼 Antargrha Yatra という有名な巡礼で、巡礼ポイントの最終地点とされている²⁷⁾ことから、聖地ヴァラナシの中でも、最重要の聖地だと言える。そしてラリタガート Lalita はガンガーから寺院までの参道の入り口に当たるといってよい。というのも、ボート観光、ボート巡礼者はガートに横付けをし、寺に向かうというルートをとるためである。そのためこのガートを守るのは政府（もしくは寺かもしれない）によって依頼を受けた寺院周辺のモハッラによって構成されるトラストが飾り付けなどをオーガナイズしている。

c) 「家族」型

このタイプもマニカルニカガートの1にしかなかった（通し番号では9）。ここで飾り付

けを行っているのは、宗教的儀礼を行う一家族によるサミティだった。365日24時間、火葬が行われているこのガートでは、このサミティを構成する家族がアールティと呼ばれる儀式を行う家族であった。サミティという形式をとっているものの、実際は一家族によるもので、資金など全てを家族で補う。飾り付けをする目的は、あくまでガンジス川への信仰であり、信仰の一環としての意識が強いようである。

d) 「モハッラ」型

この型に当てはまるものは Dev Diwali 祭のため、もしくは Varanasi で行われる祭のために創設されているサミティが多いようである。このタイプのサミティは表4-5にまとめたとおりである。

表4-5 調査地区の「モハッラ」型サミティ一覧

	対象ガート名	サミティ名、もしくは クラブ名、他	メンバーの構成	モハッラ名
4	Manmandir	Manmandir Vikas Samiti	モハッラ全員	Manmandir
5	Tripura Bhairvi	Tripura Bhairvi Dev Diwali Samiti	モハッラ全員	Tripura Bhairvi
10	Manikarnika-2	Satyam Prachar Mandal	モハッラ全員	Manikarnika
11	Scindhia	Shri Sidhn Hunuman Nav Yuwak Samiti	モハッラ全員	Scindhia, Gola Gali
12	Sankatha Ganga Mahal	Man Ganga Arti Dev Diwali Samiti	モハッラ全員	Ganga Mahal
15	Jatar	Kendriya Dev Diwali Samiti Gomersers	モハッラ全員	Jatar
16	Panchaganga - 2	Vindu Madav Sewa Sewa Samiti	モハッラ全員	Panchiganga

サミティに所属しているのは、モハッラ内部の住人全員とされている。もしくは、実際に活動しているのは若い世代だけではあるが、名目上では住人全員が構成員とされている。飾り付けているサミティは、調査範囲においては、ガートと同名か背後のモハッラの住民によって構成されており、単数のモハッラによる「一ガート、一サミティ」の場合がほとんどであり、多くて2つであった。この複合タイプは地理的な条件として、ガートの連続性が見られるなどの理由によるものが多いようである。また、資金もスポンサー企業がつくような a) の型とは大きく違い、ほとんどが住民による金、物資の両方を寄付に頼っている状態にあった。

e) 「スポーツクラブ」型

表4-6 調査地における「スポーツクラブ」型一覧

	対象ガート名	サミティ名、もしくは クラブ名、他	メンバーの構成	モハッラ名
13	Bhonsala Ganesh Metha	Metha Sporting club	クリケットチーム	周辺
16	Panchaganga - 1	Panchi Ganga Sporting Club	クリケットチーム	周辺

このタイプに当てはまるのは主にインドにおいて盛んなスポーツである「クリケット

(Cricket)」チームやスポーツクラブとして創設されたグループのことである。所属しているメンバーには若干のイレギュラーはあるもの、主に飾り付けを行っている周辺モハッラの住人である。クラブに周辺モハッラの住人全員が所属しているわけではないが、所属しているのは多くが若者であり、彼らが祭のときは上記のd)におけるような役割を果たしている。資金集めについても、同じようにほぼ寄付に頼っている。ガート周辺モハッラが中心であるが、複数のモハッラが合同して、複数のガートを飾り付けているケースもあった。

概念からの分類

以上、a) から e) までの類型が、サミティ、及びクラブの構成という実状におけるメンバー構成から行うことができた。そしてこの分類は第二章の「ローカル」「アンローカル」「タイト」「ルーズ」という概念によってガートを分類することで、二つのグループを形成することになる。

それは A : 「アンローカル」「ルーズ」に位置付けられるガートをオーガナイズするサミティのグループと、B : 「ローカル」「タイト」位置付けられるガートをオーガナイズするサミティ、もしくはクラブのグループによる二つのグループである。

A) 「アンローカル」「ルーズ」型

このグループの飾り付けるガートは「特殊性を持つガート」である。その特殊性故にインド国内外問わず訪問者がヴァラナシでも、抜きん出て多いのである。その特殊性とはヴァラナシにおいて宗教的に特に重要とされている場所である。具体的にはダサシュワメダガート Dashashwamedh Ghat、マニカルニカガート Manikarnika Ghat、ヴィシュベシュワラ寺院 Vishveshvara Mandir である。ヴィシュヴァラ寺院のあるモハッラの住民が参道として飾り付けをするラリタガート Lalita Ghat も含まれる。

資金面では、企業、巡礼者や熱心な信者達の寄付によって賄われている。つまり、外部者からの資金の入ってくる機会が多いのである。

B) 「ローカル」「タイト」型

地元の住民による、地元の住民のためのガートを飾り付けるグループで、このグループのサミティもしくはクラブは Dev Diwali 祭において最も多く、一般的な型と呼ぶことができるであろう。飾り付けているガートはサミティのメンバーが使うガートであり、外部者の利用はほとんどなく、観光客が訪れることを目的とするようなガートではない場合が多い。資金についても、「ローカル」色が非常に強く内部の寄付に頼っている。

まとめ

サミティ、もしくはクラブをメンバー構成によって a) - e) に分類し、「ローカル」「アンローカル」、「タイト」「ルーズ」によって分けると以下の表のようにまとめることができる。

表 4 - 7 サミティ、及びコミュニティの位置付けと分類

A	「アンローカル」「ルーズ」	「モハッラ」+「ボランティア」
		「政府」
		「家族」
B	「ローカル」「タイト」	「モハッラ」
		「スポーツクラブ」

4 - 4 - 3 仕掛ける方法について

4 - 5 - 1 では仕掛ける主体についての分析と考察を行った。次は表 4 - 7 に分類できたサミティ、及びクラブがいかにして「仕掛け」を仕掛けるかという点について分析を行う。

(1) 主体のヒエラルキー

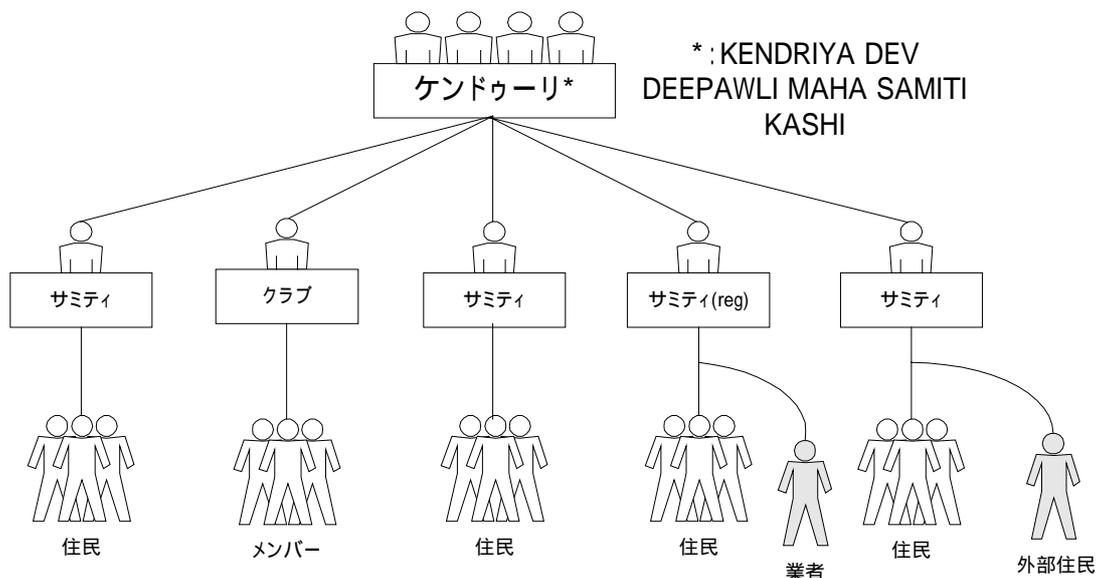


図 4 - 19 主体のヒエラルキー

Dev Diwali 祭においてサミティは、個々に機能するのではなく、事前に何度か会議を開いている。このことはヒアリング調査を行っている段階で明らかになった。そして、この会議の主催者は「KENDRIYA DEV - DEEPAWALI MAHA SAMITI KASHI²⁸⁾」というサミティであることがわかった(以下、ケンドゥーリとする)。このサミティは 1996 年から本格的に結成され、Dev Diwali 祭における役割をすべて取り仕切っている。このサミテ

イの代表に対してインタビューを取ったところ図4-19に示した明確なヒエラルキーを持った組織体系によってこの祭が運営されていることが分かったのである。まず最下層には<住民>が位置し、住民が<モハッラ>を形成し、そのモハッラによって<サミティや、クラブ>が形成されている。そして最終的にこれを束ねる役目を果たしているのが、ケンドゥーリである。また、飾り付けや、祭に必要物資が不足しているガートに対して援助を行う。ガートでの調査で、具体的にケンドゥーリの援助を受けていると答えたサミティはマニカルニカガートの「Man Ganga Nav Yuwak Samiti」があった。受けた援助の内容はオイルランプに使う油の15kgの付与であった。

(2) 仕掛けの内容

【第1段階】

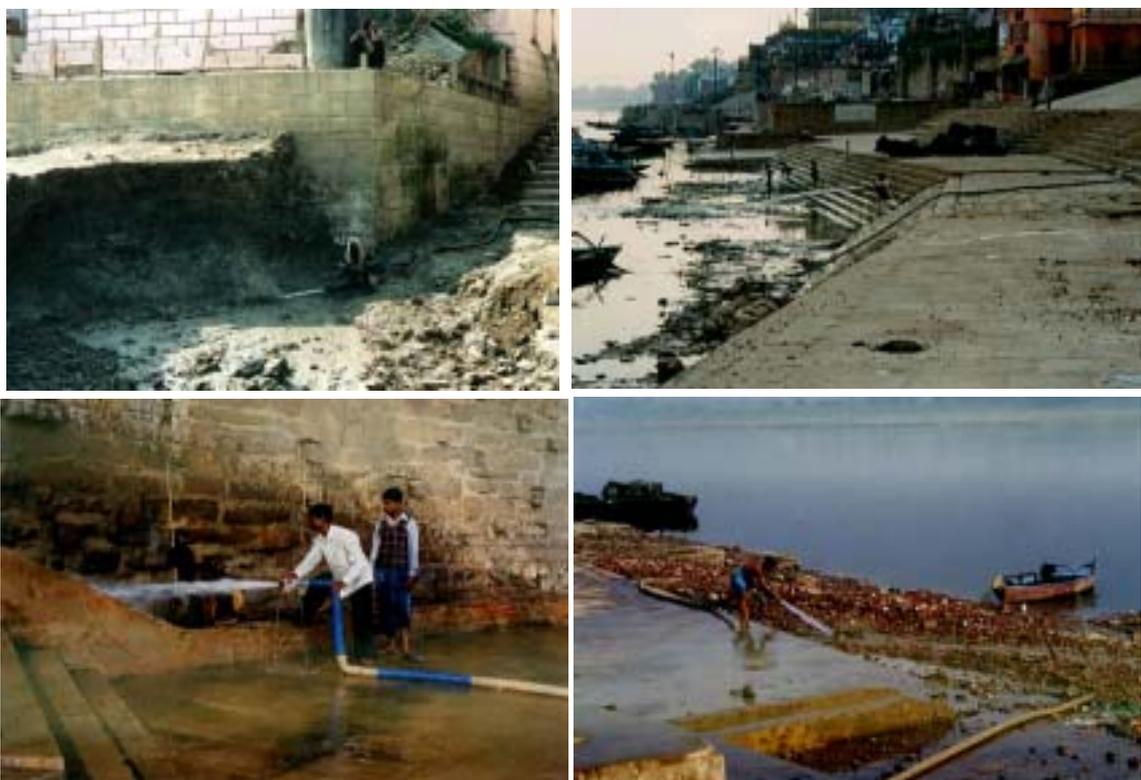


図4-20 ガートの土砂を洗い流す風景

10月になるとヴァラナシの気候は4ヶ月にも長く鬱陶しい雨季が明け、移行期を経て、乾季へと向かう(第2章参照)。乾季に入ると、ガンジス川の水位が低下し始め、雨季の間、川に沈んでいたガートの下段部は土砂が堆積した姿で現れる。そしてこの頃を境に、ガートに堆積した土砂を取り除く作業が始められる(図4-20)。その作業従事者らは、ヒアリングをしたところ、Dev Diwali 祭にあわせて、ガートの土砂を取り除くようにナガルニガムによって依頼されている。つまり、雨季が明けて、暦の上で新年を迎えると同時に、ガ

ンジス川の水位の低下と、日に日に美しくなっていくガートの様を人々は感じ取ることになる。

【第2段階】



図4-21 パンチャガンガ - ガートに設置された横断幕

Dev Diwali 祭の一週間ほど前になるとガートの至る所で図4-21のような横断幕が掲げられるようになる。この横断幕には以下の内容（上から順に）が書かれている。

- ・みんなで集ってディア（オイルランプ）を点そう。ガートに暗いところがないように！
- ・ガンガー、国を、インドをきれいに！
- ・ケन्दूर्り Dev Diwali 祭 サミティ
- ・ガンガーの保護 美しいガート！

つまり、Dev Diwali 祭と一緒に「ヴァラナシをきれいにしましょう」というメッセージが人々に伝えられるわけである。同時期には、ガンジス川にボートを走らせて、同様の内容の呼掛けを人々に行う。

【最終段階】

そして、最終段階として、人々は Dev Diwali 祭で飾り付けをという行為を通じて、ガンジス川を、そしてガートをきれいにするという統一したコンセプトを共有することになる。そのための準備として、会議が開催されているようである。つまり、会議は最終段階直前の確認作業という位置付けになるだろう。

2001 年度の調査では祭の一週間前（11月25日 日曜日）にパンチャガンガ - ガートで

行われた最終会議に参加することができた。図 4 - 22 はその会議の様子である。



図 4 - 22 会議の様子（左：意見を述べる代表者、右：ケンドゥーリのメンバー）

この会議の目的は以下の二点である。

- ・各ガートを飾り付けるサミティの代表者が、北から順に、祭の準備に際して発生している問題を発表する。ここで、発表される問題とは、資金不足が主因となって発生している問題である（例：ガートの修復が出来ない。ガートの衛生状況が悪いが改善されない、など。）
- ・ここで話し合われている問題は基本的に州政府によって解決されるべき問題のため、各ガート代表個人、もしくはサミティ単体で対州政府と交渉するのではなく、もう一段上位組織であるケンドゥーリとして、交渉するための要望をまとめる。

この会議で最も強調されているのは、この祭が州政府主導ではなく、ヴァラナシの住民が自らの手で作り上げているという自負である。そのため、州政府との対立姿勢は明確に現れていた。

また、これは彼らがヴァラナシの住民であるというアイデンティティの現れである。自分達の街はきれいにするのは当然だろうという考えからだろう。また、インド、世界でもまれに見る聖地であるという自負も見られた。そのため、サミティの代表達は街の環境を改善しようと、ケンドゥーリという組織をつくり、Dev Diwali 祭によってヴァラナシの住民に「現代的仕掛け」を仕掛けているという構図が出来ているのである。このことは、住民の意識の中に宗教的な聖地性に起因しつつ、ガンジス川やガートとの関係性に「環境美化」という新たな関係性を持たせることになり、より強固な「モハツラ（住民）」 - 「ガート」 - 「ガンジス川」の関係性を形成させることになると考えられる。

4 - 6 Dev Diwali 祭の構造のモデル化

Dev Diwali 祭の構造は 4 - 4 において「伝統的仕掛け」、4 - 5 において「現代的仕掛け」としてそれぞれに分析し、考察した。本節では、これら二つの「仕掛け」を一つの構造と

して総合的に考察を行い、Dev Diwali 祭の構造としてまとめる。

4 - 6 - 1 「仕掛け」の相互関係、及びモデル化

Dev Diwali 祭では「伝統的仕掛け」は「競い」という意識の基、自己 他者認識という第一段階として、中間集団 = コミュニティレベルでのアイデンティティを再確認する。そして、この意識は祭が進行する過程において、ヴァラナシにおけるコスモロジーの共有イメージと、祭にやってくる「外部者」 = 「観光客」と「内部者」 = 「地元住民」という明確な二項対立概念によって、意識は次第に上位化されて「ヴァラナシ」という最上位の意識レベルで統合される。

一方、「現代的仕掛け」は、本来の祭にはなかった意味付けの拡張部分であると位置付けることができる。Dev Diwali 祭の「伝統的仕掛け」には、ヒンドゥー教に起因する河岸空間としての「ガート」、周辺コミュニティとしての「モハッタ」、そして河川「ガンジス川」の関係性の下に始めて成り立つ「仕掛け」であり、「現代的仕掛け」はその関係性に対して新たな「関係性」を求める「仕掛け」ということができるのである。

つまり、「河岸空間 - 周辺コミュニティ - 河川の関係性」に対し、先ず「伝統的仕掛け」、次に「現代的仕掛け」の順で結合するという相互関係こそが、Dev Diwali 祭のモデルということができるだろう。

4 - 6 - 2 Dev Diwali 祭の構造のまとめ

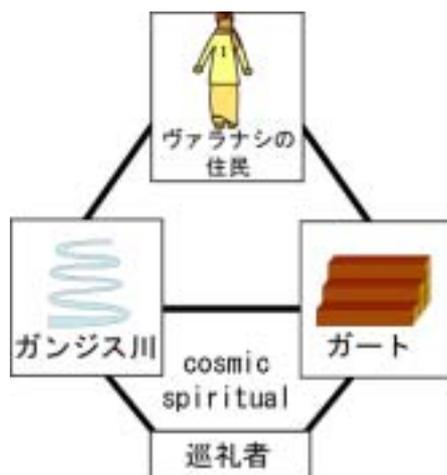


図 4 - 23 ヴァラナシの聖地性に見る関係性

いて、次から順にまとめる。

本来、ヴァラナシには図 4 - 23 に示したような、「ヴァラナシの住民」 - 「ガート」 - 「ガート」の関係性と、「巡礼者」 - 「ガート」 - 「ガンジス川」の関係性が存在する。これら関係性には、ヴァラナシの持つ cosmic や spiritual といった聖地性によって築かれているものである。この関係性はヴァラナシのいかなる状況においても常に内包されている。

このヴァラナシにおいて常に内包されている関係性に対して、本章で取り上げた Dev Diwali 祭の「伝統的仕掛け」、「現代的仕掛け」がもたらしている効果につ

(1) 「伝統的仕掛け」のもたらす効果

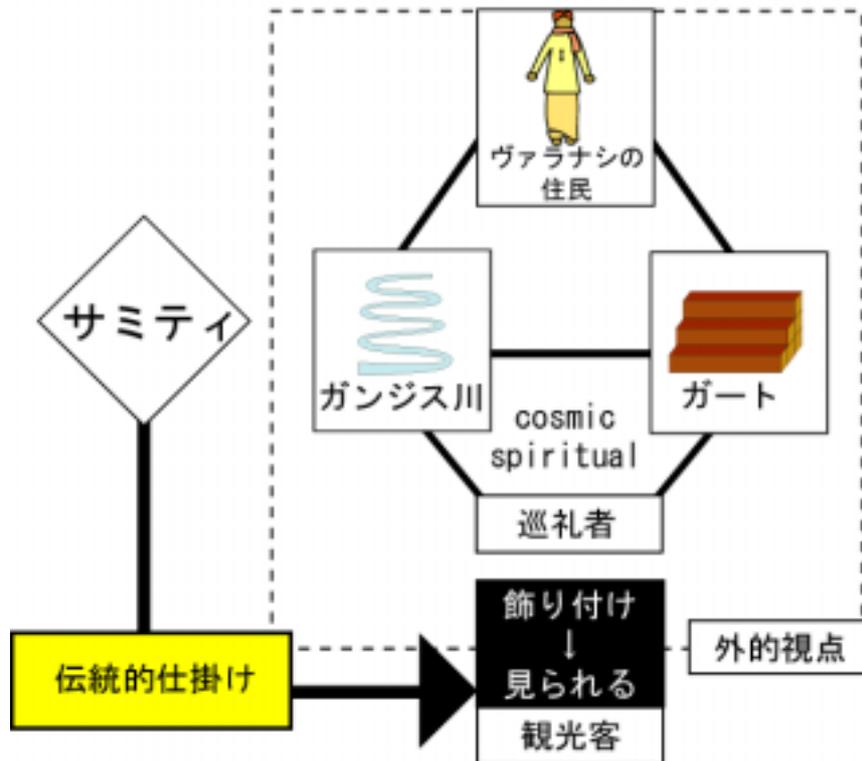


図 4 - 24 Dev Diwali 祭での「伝統的仕掛け」がもたらす効果

Dev Diwali 祭における「伝統的仕掛け」のもたらす効果とは「外的視点」であるということが出来る。Dev Diwali 祭を運営するサミテイの「伝統的仕掛け」によって、住民はガートの飾り付け、オイルランプの点火を行う。このことによりガートは非常に幻想的な光景を生み出し、その現象によって多くの観光客が訪れる結果につながっている。このことがヴァラナシの住民にとり、外部者である観光客によって「見られる」という意識を生み出すことになる。つまり、ガートを飾り付けて、オイルランプに点火する一連の行為は、現象的統一にからくるアイデンティティの形成に効果があると同時に、これは観光客の存在をも視野に入れた Dev Diwali 祭への参加という効果を生み出している。

(2) 「現代的仕掛け」のもたらす効果

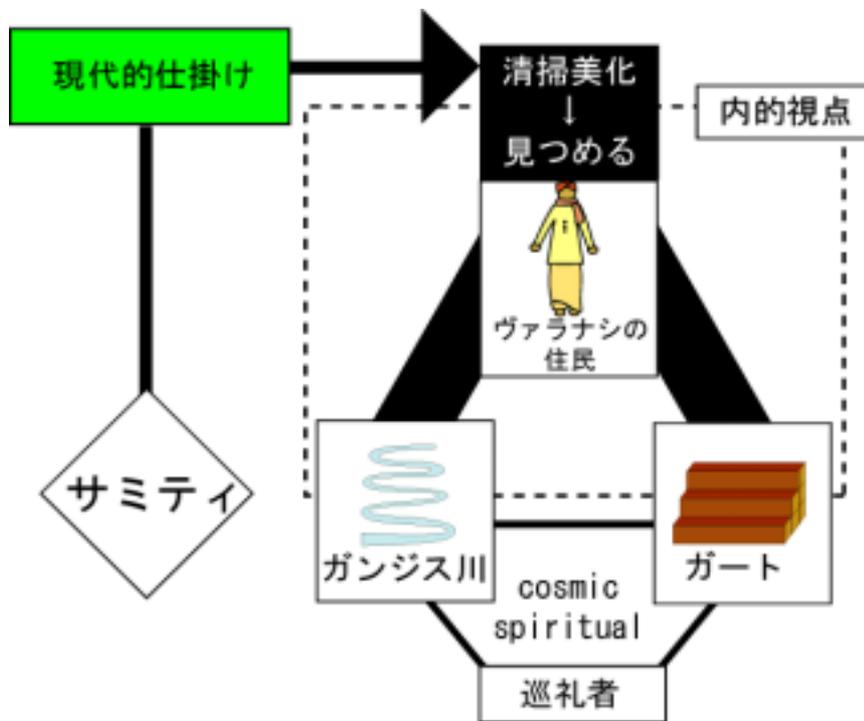


図 4 - 25 Dev Diwali 祭での「現代的仕掛け」がもたらす効果

Dev Diwali 祭における「現代的仕掛け」のもたらす効果とは「内的視点」ということができる。Dev Diwali 祭が行われる前には、サミティの代表が集まり、会議を開催する。ここではガート、ガンジス川の「清掃美化」という意識を確認する。こういった住民による動きは、それまで聖地性によって関係付けられていた「ヴァラナシの住民」と「ガート」「ガンジス川」の関係性をより一層強固なものとするのである。つまり「現代的仕掛け」によって清掃美化を行うことが、住民自らの「ガート」「ガンジス川」との関係性を見つめることとなり、「内的視点」を生み出す契機となりえるのである。

(3) Dev Diwali 祭の全体像

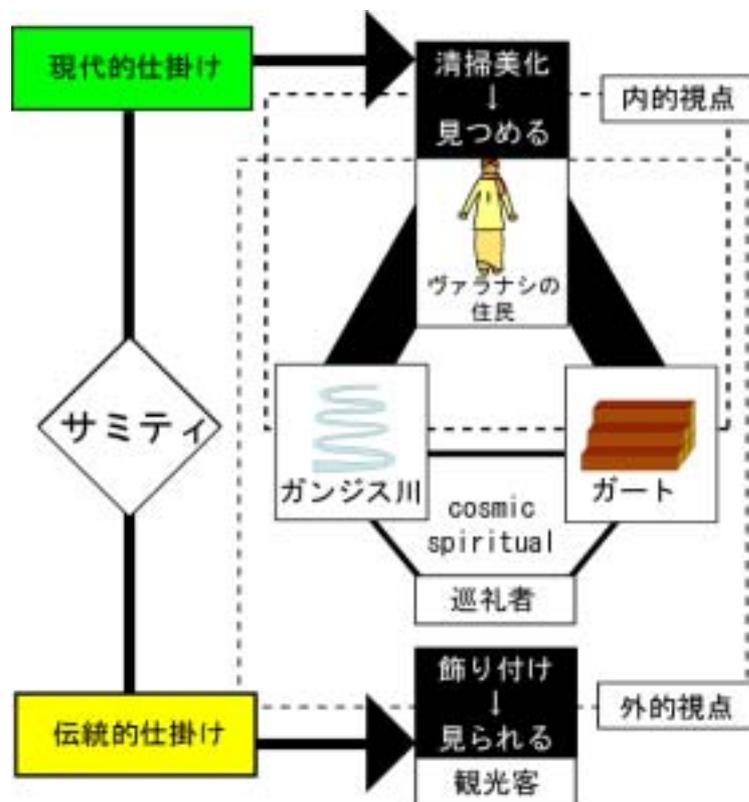


図 4 - 26 Dev Diwali 祭の構図

図 4 - 23 から図 4 - 25 を一つにまとめると、図 4 - 26 の Dev Diwali 祭の構図として示すことができる。常にヴァラナシが内包する関係性に対して、先ず「伝統的仕掛け」が「外的視点」の効果をもたらし、「現代的仕掛け」が「内的視点」の効果をもたらすことで Dev Diwali 祭の全体像として図 4 - 26 の構図ができあがっているのである。

また、これを形成するに当たって、周辺コミュニティによって主に構成されているとサミティと呼ばれるヒエラルキーを持った自治組織である。サミティが主体となり、飾り付けに現れる「伝統的仕掛け」を仕掛け、そこに「現代的仕掛け」を仕掛けることで、「河岸空間 - 周辺コミュニティ - 河川の関係性」に意味付けの拡張を意図的に作り出しているのが、Dev Diwali 祭の構造である。

第4章 引用文献、及び補注

- 1) 英語の fortnight と同意。
- 2) Rana Singh : Banaras (Varanasi) Cosmic Order , Sacred City , Hindu Traditions , pp216 - 222 , TORA BOOK AGENCY (1993)
- 3) Rana Singh,他 Karttika Purnima , Deva Dipavali , and Kashi, (2000)
- 4) Daiana L. Eck : Banaras City of Light , pp.269-270 , Penguin Books India (1983)
- 5) Dharam Vir Singh : Hinduism An introduction , p79 , Travel Wheels (1991)
- 6) M.A. Sherring : Benares The sacred city of The Hindus , D.K.publishers Distributors (P)LTD. (1868) , republished 1990

- 7) ガンガー祭と言うようなイベント。メインガートに舞台を作り、伝統音楽・舞踊などが行われる。インド中から多数のVIPも訪れる。
- 8) 正確にはUP州観光局主催の「Ganga Mahotsav」が最終日の14 - 15時に終了し、その後、飾り付けが行われる。
- 9) 芦田哲郎：祭と現代社会 序説,熊本大学教養学部紀要人文・社会科学篇 ,pp36-37(1990)
- 10) ミルチャ・エリヤーデ：叢書・ユニベルシタス14,聖と俗,p22,法政大学出版会(1969)
- 11) Dharam Vir Singh：前掲書, p56
- 12) 辻直四郎：インド文明の曙, pp60 - 61, 岩波新書(1967)
- 13) ここでは祭という狭義ではなく、それに関わる儀式全般を指す。
- 14) B.A.Gupte : Hindu Holidays and Ceremonials with Dissertations on origin , folklore , and symbols , D. K. Fine Art press (P) LTD. (1916) , re1997
- 15) Daiana L. Eck : 前掲書 , pp272-273
- 16) 菩提樹も信仰の対象となりえる。建築物を建造する時、例えインド菩提樹の大木の枝が敷地にかかかっていようと、決して切り落としたりすることもなく、むしろ、建物の中を通してしまうことすらある。
- 17) 芦田：前掲書, p37
- 18) デュルケーム：宗教生活の原初形態 下巻, p208, 岩波文庫(1975)
- 19) 小さなガートなどで、いくつかをまとめて飾りつられる場合もある。
- 20) 芦田：前掲書, p37
- 21) 芦田：前掲書, p37
- 22) 芦田：前掲書, p37
- 23) 統合される瞬間について、こういった現象を伴うのかということに付いては、述べられてはいない。
- 24) ヒアリングでは「Government」という表現だったので「政府」型とした。
- 25) Kashi = ヴァラナシ、Vishuwanath Mandir = ヴィシュヴェシュバラ寺院という意味。
- 27) Kondo , Ryujiro : Lifestyle Systems of Mohenjodaro Related to Water Facilities from Comparative Studies , WORKSHOP ON MOENJODARO (International Joint Research Project 1994-1996 by Japan Society for the Promotion of Sciences) , pp61-94 (1996)
- 28) 創立は1996年と比較的新しく、Dev Diwali 祭のためにだけに結成されるサミティ。